

踏み出そう理解への第一歩 ～知ろう学ぼう私たちのハンセン病問題～

語り手 太田明さん、Yさん

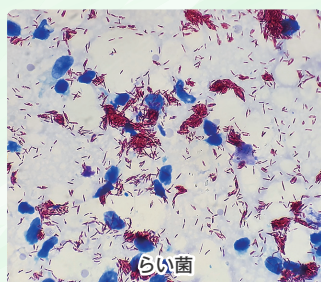
聞き手 神後智美、山下隼世、豊田美来、畠田陽葉俐
福岡県立育徳館高等学校



強制収容された入所者夫婦の手から型取りして作成された彫刻「生きた軌跡」

ハンセン病について

「らい菌」に感染することで起こる病気です。明治6年（1873年）に「らい菌」を発見したノルウェーの医師・ハンセン氏の名前を取り、現在「ハンセン病」と呼ばれています。主に皮膚と末梢神経の病気です。皮膚は痒みが無く、知覚の低下、診断や治療が遅れると指や手足の麻痺などの症状が起こります。リファンピシン抗菌薬等を内服して治療を行います。



らい菌



ハンセン病治療薬

ハンセン病問題について

強制隔離や子どもをつくらせないなど、間違ったハンセン病対策で患者や回復者、その家族の方々の人権が侵害されてきました。ハンセン病は完治する病気で、ハンセン病回復者や治療中の患者からも感染する可能性は皆無であるにもかかわらず、社会の誤解によって偏見や差別は長く起こっており、今現在も続いています。



療養所へ入所するまで



太田さん

幼年時代は不自由なく過ごしていた

太田さんは不自由のない幼年時代を過ごすことができていましたが、太田さんが4歳の時、太田さんの母親がハンセン病を発症し10年間の実家療養の後、母は菊池恵楓園に入所、そのときに母親は父親と離婚してしまったそうです。そして太田さん自身も8歳の時にハンセン病を発症し菊池恵楓園に入所することになりました。



Yさん

一度の怪我を放置したこと

小学5年生の頃から右手が曲がり始めました。6年生になると足にも斑紋が現れ、まじないを試みることもあったとYさんは語ります。昭和30年7月、治療のために別府の病院を紹介され入院しましたが、診察を受けても原因がわからず、ペニシリン注射を受ける日々が続きました。1ヶ月後、脊髄液の検査を行い、さらに別の医者に来て斑紋を確認しました。その後、12歳の春に熊本の療養所に行くことが決まりました。振り返ると、一度の怪我を放置していたことが、病気の原因だったのではないかとYさんは思っています。

偏見による差別で傷ついた日々



太田さん

差別されるのは不当だという信念

太田さんの話で特に印象に残ったのは、市内の映画館で地域の人から学校を尋ねられた経験です。太田さんは差別を受けるおそれがあるにもかかわらず菊池恵楓園の学校名を素直に答えました。その姿勢は、**ハンセン病患者が差別されるのは不当だという信念を示している**と思います。

当時、社会問題として年金獲得闘争というものがありました。それは、ハンセン病患者は施設にお世話になっているから年金受給者に該当しないというもの。これを受けて入所者は**「目が見えない、手足が不自由で働けない私たちこそ社会保障を受ける立場にあるんじゃないか」**と政府に立ち向かいました。約10年後、政府は障がいのある人にも年金を支給するようになりましたが、当時の人々の患者に対する偏見が差別を生んでいたということです。



Yさん

人が気にしていることを真似されて

学校で「しいのみ学園」という小児麻痺問題をテーマにした映画を観た際、同級生から「小児麻痺なんじゃないか」と言われて手の真似をされ、Yさんは泣いてしまいました。先生がその同級生に**「人の気にしていることを言ったり、真似をしたりしてはいけない」**と叱ってくれたこともあり、今でも鮮明に記憶に残っているそうです。また、少女舎にいた足の不自由なハンセン病患者のTさんが、歩く際にパツタンパツタンと音がしていた姿を見て、病気でない子が「Tさんの足音がうるさくて目が覚める、Yさんは静かに歩くから、Tさんもそうしなさい」と言っていて、同じ足が不自由な立場として、それを言うのはひどいとYさんは思いました。Tさんは涙を流していましたが、親が病気で子どもが健康な人もいる中で、理解を深めてもらいたいと思ったそうです。

関心を持つことから始めましょう



太田さん

偏見があるから差別は生まれる

太田さんは「ハンセン病問題を通して社会のあらゆる人権問題に関心を持ってほしい。**偏見があるから差別は生まれるので、偏見や差別に関して共に考え、共に戦う人になってほしい。**」とおっしゃっていました。差別とは周りの人々の偏見から生まれます。私たちが知らず知らずのうちに差別に加担しないようにし、周りに正しい知識を伝えて偏見を無くすためにも、ハンセン病はもちろんのこと他の人権問題についても、**自分に関係ないとは思わずに関心を持つことが大切です。**



Yさん

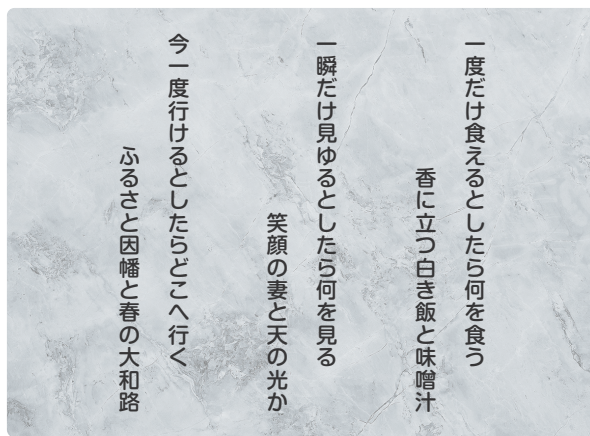
ハンセン病で生きていくには忍耐が必要

Yさんは46年間、五感を失い手足の不自由なご主人の代わりに短歌などの代筆をされてきました。ご主人が亡くなったあとも、供養のために随筆などをたくさん作られました。その中でも、特にYさんの強い思いが伝わる歌「目の見えぬ夫と散歩は二人三脚 ひとりになりて吾はよろける」には、ご主人に対する深い思いを感じました。私たちにとって、苦しいときに側にいてくれる人、寄り添ってくれる人の存在はとても大きいと感じました。またYさんは「**ハンセン病で生きていくには忍耐が必要です。**」とおっしゃっていましたが、私たちはただYさんが我慢するのを見ていればいいのでしょうか？**私たちがこのことに関心を持つこと、そして理解する努力をすること、それが私たちにできる「寄り添う」ことになるのではないのでしょうか？**

心の拠りどころ



菊池野とは太田さんの所属する自治会の月刊機関誌です。ハンセン病の歴史を学べる資料の1つです。内容は多彩でハンセン病の概要や園内での活動などが書かれています。



ハンセン病回復者の方は、隔離されてきた中で楽しみや生きがいを見つけるために、短歌や絵画などあらゆる文化面で活動されてきました。ここでは、Yさんのご主人が作られた短歌を紹介します。

ハンセン病問題を学んで



神後 智美

回復者さんと直接お話をしたことによってハンセン病問題への理解だけでなく、これから私たちがどうするべきなのかということ深く考えさせられました。小学校、中学校でハンセン病問題に関する授業があったものの、問題の核心に触れる部分は取り上げられていませんでした。この取り組みによってもう二度と繰り返してはいけない悲惨な過去を沢山知り、私達とハンセン病問題は無関係でない、しっかり理解を深めこの事実を多くの人に知ってもらわさきだと感じました。回復者の高齢化が進んでいるため私達が同世代、次世代に語り継いで行くべきだと実感しました。再びハンセン病のような未知の感染症が現れたとき差別がないよう、これからもハンセン病問題をはじめとする差別問題に関心を持ち続けようと思います。



山下 隼世

今回のインタビューを通してハンセン病問題に関する知識を得るとともに、回復者の方のお話から様々な教訓を得ることができました。中でも印象に残ったのは「今の貴方達は学校や家庭といった保護社会にいる。だが社会人になるとそれらは無くなる。」という言葉です。私は当初、このシンポジウムは差別問題を繰り返さないように、そしてハンセン病問題を風化させないためのものであると考えていました。ですが差別問題は今もなお残っており、多くの人に問題について意識を向けてもらい、解決に導いていくという目的もあったのだと気づかされました。差別問題はかつての話ではなく、今も、この先の未来にとっても関係のある問題なので、自分が加害者被害者にならないように問題に意識を向けることが大切です。



豊田 美来

小学校6年生のときに、担任の先生からハンセン病問題について多くのことを教わり、ずっとハンセン病回復者の方々に対する差別や偏見をなくしたいと思っていました。そんな中で、このシンポジウムに参加し、実際に菊池恵楓園に行き、回復者の方のお話を聞きたくさんのことを学ばせていただきました。特に、私がお話を聞いたYさんの「ハンセン病で生きていく、療養所で生きていくには、忍耐が必要です。耐えることを知らない人はここでは生きていきません。」というお言葉は、非常に考えさせられるものでした。そして、今回学んだことを次の世代、とりわけ、これからを担う高校生以下の人たちに伝えていこうと思いました。そして、差別や偏見がなくなる未来をつくっていきます。



畠田 陽葉例

この活動に参加するまでハンセン病問題をあまり知りませんでした。授業で学ぶだけで過去のことだと思っていました。しかし、実際にこの活動に参加して、この問題に対する印象が変わってきました。ハンセン病は過去の話になってきていますが、ハンセン病回復者さんやそのご家族の方は、今も偏見や差別で傷ついています。そのことを理解し、同じことを繰り返さない教訓にするべきです。残念ながら、コロナが蔓延したときも偏見や差別をする方がいました。私はこの活動のおかげで、そんなことをしてはいけないうるようになりました。私ひとりが意識を変えてもなににも変わらないかもしれませんが、みなさんにこうして伝えることはできます。同世代の高校生たちに、私と同じような考えを持つ人が増えてくれると嬉しいです。